

団体名		特定非営利活動法人びーのびーの（横浜市港北区） http://www.bi-no.org/top.html	
団体の概要	活動開始年	西暦 1999年 5月 活動開始 西暦 2000年 2月 特定非営利活動法人取得	
	メンバー 人数	<役員数> 5名 <賛助会員数> 82名 <事務局・ひろば運営スタッフ数> 5名(事務局が3名、ひろば運営スタッフが2名で、うち4名が有給。事務手続きで途切れることなく、ひろばの運営に責任をもって対応するために、活動開始2年目より段階的に有給スタッフを増員した。) <ボランティア数> ボランティアスタッフ 30名 サポーター・学生ボランティア50名	
		構成	メンバーは30歳代が中心、ボランティアは学生から70歳代まで
	予算規模	平成13年度概算 ・収入・支出 11,000,000円	
団体の目的		核家族化、少子化が進行し地域的つながりが薄れる中、子育てに悩む親を支援するとともに、子どもたちの健全な育成をめざし、地域の中で支えあい育て合うための施設運営事業を行い、活力ある住み良い地域社会をつくることを目的とする。	

ボランティア活動の概要

活動の中心は、親子のための育児支援施設「おやこの広場びーのびーの」の運営である。商店街の一角にある約20坪のスペースを提供することで、子どもは遊びを通じていろいろな子どもと関わることで成長し、親同士は多くの出会いと交流を深めていく場となっている。「びーのびーの」という名称は、親も子どものびのびと共に育みたいという願いをこめてつけた。「おやこの広場びーのびーの」午前9時30分から午後4時までが開館時間である。子どもの生活リズムにあわせて、お誕生日会やおはなし会、赤ちゃん体操、子育て・発達の相談会など、小さなプログラムを組んでいる。

託児ではなく、親子で日常的に集える場を提供している。日によって違いますが、平均すると15組くらいの利用者がある。午前中にきてお昼を食べて帰る人や、お昼過ぎにきて昼寝を少しさせて帰っていく人など、利用時間や時間帯は様々である。子育て真っ最中のお母さん達自身によって運営され、専門家や学生ボランティア、子育てをひと段落した子育てサポーターの協力によってささえられている。

そのほか、親子のための育児支援プログラムや、地域に根ざした育児支援のための異世代交流事業、子育てに関するセミナー・イベント、子育てに関する調査を企画・実施している。また、子育てに関する地域への情報発信として、月刊の広報紙(無料、2000部配布)、HPでの広報をしており、地域の幼稚園・保育園ガイドも毎年出版している。

組織運営の概要

びーのびーの組織体制は、理事会、運営委員会、事務局、ひろば部会、広報部会という構成となっている。団体の意思決定にあたっては、運営委員会（月1回から2回）で検討し、全体会（月1回）で承認をとる。

ひろば部会、広報部会などメンバーがそれぞれ責任を持って活動に参画する意識を持てるように工夫している。また、年度ごとに個人面接を行って、ライフステージや家族の状況など個々の事情にあわせて参画の仕方を見直すなど、柔軟な体制になっている。

元気に活動している要因

<要因1：とことん話し合う>

月曜日にメンバー全員に今週の予定をメールで配信して情報の共有化を図っている。さらに、月に1回の全体会やテーマ別に設定した話し合いの場で、メンバー同士とことん話し合っている。その結果、環境プロジェクト、会員管理システムプロジェクトなどさまざまなプロジェクトが生まれ、主体的に活動することができている。

<要因2：拠点の確保>

商店街に空き店舗があることを知り、そのオーナーに活動内容を説明し店舗を貸してくれないかと頼んだところ、「昔はどこの家も商店街で子どもを育てた。自分も商売を手伝いながら商店街で育てられた」と賛同してくれ、保証金無しで店舗が借りられることになった。

<要因3：向上心をもって知り組む>

NPOマネジメントセミナーなど、外部研修に積極的に参加したり、学識経験者等の講師を招いて勉強会をしたりするなど、ひとりひとりが向上心を持って、メンバー同士が互いに学びあいながら活動している。

<要因4：他団体・機関との連携>

地域から全国レベルまで幅広くテーマ別にネットワークがある（NPO、子育て支援、異世代交流、つどいの広場、商店街との連携、コミュニティビジネス、文庫活動、木のおもちゃ、ボランティアコーディネイト、障害児・者支援など）。

今後の課題と展望

子育て当事者の声を社会が受け入れ始めてきたと感じる。少子化の原因を探るだけでなく、今いったいどんな支援が望まれているのか、当事者側から発信していきたい。行政に頼るだけでなく、自立した市民として社会を担っていく責任を問い、自分たちの子ども

の将来のためにも暮らしやすい地域社会をつくっていききたい。

課題としては、安定的な経営基盤づくりがあげられる。助成金、賛助金、会費、市民ファンド、マーケティング調査、企業へのアプローチなど、360度の視野に立った財源確保に務めたい。また、一人ずつでもスタッフが有給となれるよう地域で働くという視点を確立していくこと、「子育ての社会化」、地域や社会で子育てを支えるという考え方を広めることを目的として、戦略を考えていきたい。

(団体代表者によるレポート、団体資料より作成)

<「おやこの広場びーのびーの」の様子>



<この事例のポイント>

学生から高齢者まで多世代のボランティアが関わっていると同時に、学識経験者をはじめとする専門家や、他の団体とも積極的に連携して活動を行っていることが、元気に活動を継続できている秘訣である。

また、利用者はもとより、ボランティアも集まってしやすいという駅前商店街という利便性の高い立地を活かしていることも必要なポイントである。商店街の空き店舗という拠点を積極的に開拓したことで、店主達が子どもに声をかけてくれたり、商店街との連携事業を行ったりなど、地域を巻き込んで活動の幅が広がっている。

最近では、利用者だったお母さん方が今では活動メンバーになっているという。さらに、中心メンバーは主婦であるものの、妻の活動に影響されて夫の出番や活躍機会も増えているそうである。メンバーが生き生きと活動している様子を身近に感じることで、ボランティア活動に参加してみたいという意識づくりにつながっている事例である。ボランティアコーディネーターとして市民の活動意欲を引き出すにあたっては、こうした効果を活用していく方法も考えられよう。